

「ロシアで出版された日本語教育文献

—1945年まで— 附：「露日対訳日本語教育文献リスト」

- 発表内容
1. 文献リスト作成に用いた二つの資料について
 2. ロシアにおける日本語研究教育史概観
 3. 「露日対訳日本語教育文献リスト」解説

0. はじめに

1. 文献リスト作成に用いた2つの資料について

1.1. 資料1. В.М.Алпатов. Изучение японского

языка в России и СССР. Москва, 1988. (V.M.アルパート
『ロシア・ソビエトにおける日本語研究』)

[著者] アルパート, ウラジーミル・ミハイロヴィッチ (1945年生). 1968年モスクワ大学文学部卒, 文学博士. ロシア科学アカデミー東洋学研究所言語部部長を経て, 1996年東洋学研究所副所長. 主著:
『現代日本語における敬語』1973. 『現代日本語における文法単位の構造』1979. 『日本—言語と社会』1988, 以上モスク. 『第2回国立国語研究所国際シンポジウム—新しい言語理論と日本語—』講演「人間中心主義, 体系中心主義と日本語」1994.6.1.東京.
「ロシアおよび日本における標準語比較の試み」『言語学林1995-1996』三省堂. 1996.

[章立て] 1. 18世紀ロシアにおける日本語, 2. 19世紀末—20世紀初頭のロシアにおける日本語研究, 3. 日本学者としてのE.D.ポリワノフ, 4. 十月革命後の時期における日本学の発展, 5. N.I.コンラッド—ソビエト日本学派の始祖, 6. 1930年代の研究における日本語, 7. N.I.フェリドマンの日本語研究, 8. 戦後のモスクワの日本学者による研究, 9. 戦後のレニングラードにおける日本語学の発展, 10. 結び.

[特徴] ロシアとソビエトの日本語学を二つの観点から検討. (著者序文より)

- ①事実に関する側面: ロシア・ソビエトの日本語学者の経歴と研究状況についての情報提供.
- ②言語学的観点: 日本語研究を一般言語学的思考の反映の面から, 又, 日本語学の対立する問題についての解釈の面から検討する.

1.2. 資料2. Библиография Японии, литература

изданная в советском союзе на русском языке, с 1734 по 1917. То же, с 1917 по 1958, и с 1959 по 1973. М, 1965, 1960, 1984. (『日本書誌—ソ連においてロシア語で出版された文献, 1734年から1917年まで』1965年刊. 『同1917年から1959年まで』1960年刊. 『同1959年から1973年まで』1984年刊) Nauka reprint. Tokyo, 1987. 全ソ国立外国文献図書館東洋部, ソ連邦科学アカデミー東洋学研究所 (当時アジア諸民族研究所) 日本部編纂.

[採録文献数と分野]

- ①1965年刊行版: 1734~1917年. ロシアの領土で発行されたもの. 7,897点
- ②1960年刊行版: 1917~1958年. 革命後1958年までに公刊された文献. . . 6,249点
- ③1984年刊行版: 1959~1973年までのソ連邦における出版物. 5,17

2点

分野別採録文献数の時代による増減（高野1994+下瀬川）

主要共通項目	1734-1917（1965年版）	1917-1958（1960年版）	1959-1973（1984年版）
外交	2,558点	355	539
経済学	1,341点	1,073	1,198
地理・民族学	784点	217	309
軍事力	772点	271	52
歴史	749点	987	582
文学	540点	574	1,019
教育・科学	298点	152	204
新規項目		日本の軍国主義・・・1735	日本のマルクス・レーニン・・・15

2. ロシアにおける日本語研究教育史概観

2.1. 18世紀— 日本漂流民による日本語教育と教材（村山1963）

日本語学校： ペテルブルグ元老院内—科学アカデミー内—イルクーツク航海学校付設

教師： 1705～伝兵衛，①1736～ゴンザ，A. ボグダノフ，②1746～竹内徳兵衛配下，トウゴロフ，③1791～庄蔵，新蔵，④1796～新蔵，善六，⑤.1810～善六

教材：① ゴンザの日本語教材，初の露和辞典を含む6点（1736-39）

②第2の露和辞典「A. タタリノフの露日語彙」（1782アカデミー提出）

2.2. 19世紀— 露日交渉の始まりと辞典・文法書

2.2.1. ロシア人（第2回遣日使節）の手になる著作

N.P.レザノフ『文字・初歩文法規則・会話から成る日本語の手引き』（1803）

——『ロシア語アルファベットによる日本語辞典』（1804）

2.2.2. 日本滞在経験者による著作

I.A.ゴシュケヴィッチ編『露和辞典（『和露通言比考』）』（1857）

D.Dスミルノフ『日本語学習指導書』（1890）

2.3. 19世紀末— 大学日本語講座の開設

2.3.1. ペテルブルグ大学日本語講座

1854年東洋学部設置. 1870年より同学部で非公式な日本語講座実施. 講師は橘耕斉-西徳次郎-安藤謙介-黒野義文. 1898年, 日本語講座開設正式認可. 開講は1908年V.Ya.コスティレフの助教授就任以降. 教授陣は黒野, D.M.ポズドネフ, V.P., パナエフ.

2.3.2. ウラジオストク東洋学院（現極東国立大学）創設

1899年, 極東初の高等教育機関（4年制）として創設. 実務家養成が主眼. 学院長A.M.ポズドネエフ（モンゴル学者. ペテルブルグ大学教授）. 11月開講. 1991年度学生数42名, 1909年度168名（うち聴講生7名—83名）.

2.4. 20世紀初頭— 研究教育活動の発展

2.4.1. ペテルブルグ大学における日本研究者の輩出

1912~14年の才能ある卒業生たち：E.D.ポリワノフ, N.I. コンラッド, M.N.ラミング, N.A.

ネフスキー, O.O.ロゼンベルグ, O.プレトネル兄弟. (その前にエリセーエフ)

2.4.2. 東洋学院と卒業生

1900年E.G.スバリヴィンが教授就任, 活発な教育研究活動. 1905-06年, D.M.ポズドネエフが学院長. 主力教員の大半はペテルブルグ大学出身の若手研究者. 初期の卒業生の日本学への貢献: G.I.ドーリャ, V.M.メンドリン, A.N.ペトローフ, G.G.クシミドフなど.

2.5. 時代 (1917~) の日本研究機関

2.5.1. レニングラード (旧ペテルブルグ) 大学

革命後の諸機構の改革で日本語講座も数次の改組を経て, 1937年設置の文学部東洋学部へ. この時期, 日本研究の中心は本学で, 学術研究的性格の出版物多数 (N.I.コンラッド, E.M.コルパクチ, N.A.ネフスキー, A.A.ホロドヴィッチ, N.I.フェリドマン等). 登場してきたA.A.パシュコフスキー. この時期教科書はO.P.ペトローフ, T.S.ユルケヴィッチ.

1937-38年の粛清による犠牲, E.D.ポリワノフ, N.A.ネフスキー, D.M.ポズドネエフ他.

2.5.2. 極東国立大学 (旧東洋学院)

東洋学院は既設2学部と共に, 1920年国立極東大学 (東洋学部・歴史言語学部・社会学部の3学部) となった. 中央からの要請で軍要員養成も実施. N.P.オヴィジエフ (1932日本学科主任) の下で活発な著作・出版活動. しかし, 1937-38年の粛清で日本学科はオヴィジエフ以下8名が犠牲となり, 東洋学部は壊滅状態. 1939~57年の間, 大学は閉鎖.

2.5.3. ソ連科学アカデミー東洋学研究所

アジア博物館改組により1930年設立. 最初の採用はN.I.コンラッドとN.A.ネフスキー. 1932年, 研究所内に日本学協会が生まれN.I.コンラッド会長, 日本研究者30名が参加.

2.6. 第2次大戦後の諸機関

1944-45年, 各機関は疎開地から戻り, 日本研究が本格的に再開. 戦後はモスクワが日本語研究の中心となった. ソビエト日本学の歴史における新時代の開幕で, 結果としてモスクワ (現代) と, レニングラード (古典) の研究分野の「棲み分け」をもたらした.

日本語研究の指導的中心であったモスクワ東洋学大学は1954年廃止, 国際関係大学へ移された. モスクワ国立大学 (1755年創設) 東洋語学部設置は1956年. 59年から日本研究志望者の受入れ開始. 1972年よりアジア・アフリカ諸国大学となる.

3. 「露日対訳日本語教育文献リスト」解説

3.1. 分類・採録基準・採録数

[分類] 1. 辞書・便覧・会話集など 2. 文法書・教科書・教材など

[採録数] アルパートフ (1988) より69点 (51点は『書誌』と重なる). 『日本書誌』 (1965;1960) 2冊の「言語学」部門 (276点) より112点. 合計 130点採録.

[採録基準] 学習・教材的用性格のものを中心とし, 純粋な学術論文, 機関報告は採らず.

3.2. 主要著作と著者紹介

3.2.1. 「辞書・便覧・会話集」の部より

① ゴシユケヴィッチ, I.A.編『和露辞典 (『和魯通言比考』)』 (1857)

〔経歴〕 第3回遣日使節^フチャーチンの随員として来日。1年以上の断続的交渉の末に日露和親条約締結。本条約に基づき、1858～65年の7年間、函館初代^フ領事。

『露和辞典(和魯通言比考)』 B5版462頁。序文17頁、正誤・補遺3頁。最初の本格的和露辞典。片仮名表記の見出し語数18,000語以上、イロハ順配列。漢語には漢字添付、各語にロシア語訳。資料として天草版日葡辞書、^ドリグス^コリヤト^ドの文法書、^ドハーストの語彙集等。底本は『真草南点早引節用集』の模様。本国での出版は再来日以前(中村1986)。

② ポズドネエフ、^ドミトリ[・]マトヴ[・]エウ[・]イチ『露訳漢和字典』(1908)

〔経歴〕 1876年、ペテルブルグ大学東洋学部卒。84年から同校教授。日本支那蒙古満州語の専門家。1899年創設のウラジオストク東洋学院教授、1905-06年同所長。1906～10年、日本に滞在。帰国後、ペテルブルグ大学東洋実用アカデミ設立に関わりかつ教えた。1917-37年、ペテルブルグ大学その他で教授。他の著作『日露関係北日本資料』1909、横浜。『日本。国土、人々、歴史、政治』1925、モスクワ。

『露訳漢和字典』明治41(1908)

一般的な辞書でもあり漢字字典でもある。部首配列構成、漢字数4,200字(字数の上ではロシア国内出版の日本語辞書中最大)。漢字及び実際の語例提示。詳細な「日本語の文字概説」添付。独創的な内容ではないが、日本語の文字についての丁寧な説明である。特に漢字の部首分類表・音訓表・変体仮名表が注目に値する。本書の「概説」はロシア語で書かれたこの種の内容の典拠として、現在に至るまで最も完全なもの(アル[・]ト1988)。

3.2.2.「文法書・教科書・教材の部」より

① スミルノフ、^ドミトリ[・]ト[・]ミリウ[・]イチ『日本語学習指導書』(1980)

〔経歴〕 1855年生。神学校第2学年で僧籍に入り牧師となり、日本で2年間伝道して日本語を研究。多くの教会賛美歌をスラブ語から日本語に翻訳。

『日本語学習指導書』 ロシア初の日本語文法書。序文に見る本書編纂の目的：「それまでの露日辞書等の不完全さを見、軍人等ロシア人旅行者の声と自身の経験から本書を編纂するに至った。アストン、ヘボン等を参考にしたが、滞日1年半の成果であることの欠陥は指摘願いたい。」13章立て：①序説、②動詞と活用、法・相、敬語、③名詞、④代名詞、⑤形容詞、⑥敬称接頭辞、⑦副詞、⑧数詞、⑨後置詞、⑩接続詞、⑪間投詞、⑫語序、⑬日本の度量衡・金銭と時間係数・距離と道程の尺度、容積、重量、... (吉町1977)。

② 黒野義文『露和通俗会話編 附日本諺語俚語及文句小集』(1894)

〔経歴〕 日本のニコライ露語学校から東京外国語学校魯語科に入り、卒業後同校教師。のち文部省で露和辞典の編纂。1886年渡露、ペテルブルグ大学日本語講師。30年近く教え当地で1918年死去。著作は『露和通俗会話篇』、『日本の伊呂波』、共著『日本語独習書』。

『露和通俗会話篇 附日本諺語俚語及文句小集』 黒野の主著。露和对訳文にロシア文字・仮名文字の読みが添えられた630頁の大著。主要部は会話教材で、第1部は入門的な語彙と練習文、第2部は生活や国土・学業・旅行などについての場面会話中心の構成である。第3部は日本の諺や成句集で、935例にロシア語の諺234例を加えてある。

③ スパリヴィン、^エグ[・]ゲ[・]ニ[・]ケ[・]リ[・]ホ[・]イチ(1872-1933)とその教材

〔経歴〕 ラトビア出身、1898年ペテルブルグ大学法律経済学科に入学。東洋学部に転科し支那満州蒙古課程修了。在学中朝鮮語・日本語を学ぶ。1899年後の日本語講座担当候補として

日本へ派遣されたが、帰国に際し東洋学院の日本語教授職受諾、以後同校で教授。

【活動】 広範で多面的。教材作成、学習課程の組織化、図書館・出版事業にも取り組んだ。

日本語の教師通訳実務家。日本語を巧みに使いこなし、日本文化の知識にも優れる。

【教材】 多くの教材を、1910年頃までは一人で作成に当たり、全てのカリキュラムを独自に作成した。教材には、読本・翻訳通訳の手引き・会話集・文字入門など。口語も文語も含まれている。最もよく知られた教材は [アルパート193, 194, 195] 。

【文法の講義】 後の日本学者に対する先見性と限界。(アルパート1988)

【功績】 東洋学院における日本学の確立。日本語要員の育成。(グロムコフスカヤ1997)

④その他の著作と作者

4. 終わりに

参考文献

アルパートフ, V.M. 著, 下瀬川慧子・山下万里子・堤正典共訳『ロシア・ソビエトにおける日本語研究』東海大学出版会, 1992.

グロムコフスカヤ, リディヤ著, 外川継男・原暉之訳「ロシアにおける日本研究—時代と人びと—」『講座スラブの世界(8) スラブと日本』弘文堂, 1997.

国際交流基金『ソ連における日本研究』「歴史と現況」加固寛子. 1990.

下瀬川慧子・山下万里子・堤正典「『ロシア・ソビエトにおける日本語研究』—(V.M.アルパートフ著) 索引およびロシア語文献和訳—」『東海大学紀要留学生教育センター』21号, 2001.

スパルウキン『横目で見た日本』新潮社, 1931.

高野明 『日本とロシア』<精選復刻紀伊国屋新書>1994.

———「東洋学院(浦塩斯得)に於ける日本研究」『日本歴史』77. 1954-10.

———「東洋学院刊日本関係文献目録」『日本歴史』79. 1954-12.

中村喜和「『和魯通言比考』成立事情瞥見」『国語学のために』第2部. 笠間書院, 1986.

村山七郎「ロシアの日本語学校について」『早稲田大学図書館紀要』第5号「ロシア・ソビエトの日本研究について」. 1963.

オ・ペ・ペトローワ原著, 寺川喜四男・稲垣敏夫訳注編「レニングラード大学における日本言語学講座とその史的展開」『ソ連の日本語』第1巻. 有明書房, 1964.

ミハイロワ, ユリヤ「スターリン時代の日本学者」『窓』78号. 1991.10.

吉町義雄「露都創刊日本語典」『近代語研究』第5集. 武蔵野書院, 1977.

レシチェンコ, ネリ著 谷内美佐子訳「ロシア人の日本情報の集大成—『日本書誌』ができるまで—」『窓』84号1993.4, ナウカ

Алпатов В.М. История лингвистических учений 2-изд., исп. М., 1999. (V.M.アルパートフ「言語学者の歴史」)

Бабинцев А.А. Из истории русского японоведения. Японская Филология. М., 1968. (A.A.バビンツェフ「ロシアの日本研究史から」)

Известия восточного института №1, 1994.

Дальневосточного государственного университета. (『東洋学院紀要』1, 1994. 極東国立大学)

以上